

学級担任が行う健康観察に関する実態調査

A Study on School Health Observation of Homeroom Teachers

石山志央子*・小林 央美**・新谷ますみ***

Shioko ISHIYAMA*・Hiromi KOBAYASHI**・Masumi ARAYA***

要旨

学校において学級担任をはじめとする教職員により行われる健康観察は、日常的に子どもの健康状態を観察し、心身の健康問題を早期に発見して適切な対応を図り、学校における教育活動を円滑に進めるための重要な活動である。そこで、特に児童生徒と日常的に関わり教育活動を進める学級担任の行う健康観察に着目しその実態について質問紙調査を行った。結果、朝の健康観察は、小学校では98.8%、中学校では100.0%、高校では73.5%の割合で実施していた。校種別にみた朝の健康観察の主要な方法は、小学校では「健康状態申告方式」、中学校では「自己申告方式」、高校では「観察方式」であった。朝の健康観察は「体調不良を訴えた児童生徒の経過観察」に最も活かされていた。健康観察の機会の内、「朝の会」を小学校では特に大切にしていた。高校では、「清掃時」や「放課後」等も大切にしていた。朝の健康観察の方法は発達段階に応じて選択されており、その日一日の教育活動で行う健康観察に連動されるように活かされており、特に重点的に行う必要があることが示唆された。

キーワード：学級担任、健康観察、朝の健康観察の方法

I はじめに

学校において学級担任をはじめとする教職員により行われる健康観察は、日常的に子どもの健康状態を観察し、心身の健康問題を早期に発見して適切な対応を図り、学校における教育活動を円滑に進めるための重要な活動である¹⁾。学校保健安全法の改正 (H21.4.1 施行) により、健康観察は法的にも位置づけられ、充実が図られた。

平成24年に養護教諭135名を対象に行った江岸らの調査により、養護教諭は健康観察の機会や記録を、学級担任が子どもを全体的 (共時的、経時的) に把握するのに役立つと捉えている²⁾ ことが明らかにされた。また、平成23年に中澤らが小学校の養護教諭93名、小学校の学級担任85名を対象に行った調査では、朝の健康観察を健康状態申告方式により実施している学級担任は約9割であった。さらに児童とともに適切に健康観察を行っていくためには、1日の多くの時間を児童と直接関わっている学級担任が、学級の実態や児童の発達段階を把握し実施していく必要がある³⁾ ことが明らかにされた。しかし、より一層教育活動や学級経

営に生かされるような有効で組織的な健康観察を進めていくために、学級経営との関連で捉える健康観察のあり方や、健康管理・健康教育の専門性を発揮しながら学校保健の中核的役割を果たしている養護教諭の行う保健室経営との有機的連携のあり方などは明確ではない。

そこで、本研究では学級担任の行う健康観察についての実施の状況や活用等の実態を調査し、今後さらにより良い健康観察を行うための在り方について明らかにすることを目的とした。

なお、全教育活動において行う健康観察の中でも、朝の健康観察が特に大切⁴⁾ とされていることから、本研究では朝の会や朝のSHRで行われる健康観察を「朝の健康観察」とし、全教育活動において実施される健康観察を「健康観察全般」として調査した。

II 方法

1. 調査対象：A県とB県で勤務する小学校97名、中学校14名、高等学校 (以下、高校と記す) 41名の学級担任、計152名を対

* 秋田市立桜小学校
Sakura Elementary School, Akita, Akita Prefecture

** 弘前大学教育学部
Faculty of Education, Hirosaki University

*** 弘前市立第一中学校
Daiiti Junior High School, Hirosaki, Aomori Prefecture

- 象とした。回収率は88.8% (135名)、有効回答率は98.5% (133名)であった。
2. 調査期間：2015年11月7日から同年12月9日までであった。
 3. 調査方法：選択肢式と一部自由記述式を併用した質問紙を用い、郵送調査法で行った。
 4. 調査内容：①「朝の健康観察」に関する項目（朝の健康観察の実施状況や方法など）
②「健康観察全般」に関する項目（特に大切にしている健康観察の機会など）
③学級担任自身に関する項目（学級の人数や勤続年数など）
 5. 分析方法：統計ソフト SPSS16.0 J for Windows を用い、記述統計量の算出及び、一要因の分散分析、多重比較を行った。有意水準は5%とした。
 6. 倫理的配慮：対象者に研究の趣旨と倫理的配慮について紙面で説明し、辞退の自由性にも配慮した。

Ⅲ 結果と考察

1. 朝の健康観察の実施状況

朝の健康観察実施の有無について回答を求めたところ、全体の92.5% (123名)が実施していた。平成22年に実施された和泉らの調査⁴⁾では、校種別の実施状況が、小学校、中学校ともに100.0%、高校42.0%であったが、本調査では、小学校98.8% (84名)、中学校100.0% (14名)、高校73.5% (25名)であり、小中学校では同様、高校では高い結果が得られた。児童生徒が今日一日の学習を続けられる状態か、病気や不調の徴候がないかなどを見るためにも、朝の健康観察を意識的に行う必要がある⁵⁾。また、朝の健康観察に際して困っていることの自由記述において、「SHRの時間が短い」や、「行事等が入ることで時間の制限がある」などがあげられた。

2. 朝の健康観察の方法とその選択理由

朝の健康観察の方法として①氏名読み上げ方式（呼

名しながら児童生徒の観察を行う方式）②健康状態申告方式（児童生徒自身が健康状態を申告する方式）③理由申告方式（児童生徒自身に健康状態とその理由を申告させる方式）④観察方式（呼名せず全体を学級担任が見回し、児童生徒の健康状態を観察する方式）⑤相互観察方式（児童生徒のペア・又はグループで相互に観察させ健康状態を申告させる方式）⑥各自記入方式（各自で健康観察簿に記入させる方式）⑦症状読み上げ方式（観察項目毎に児童生徒にその症状がないかを問いかけ挙手させる方式）⑧自己申告方式（具合の悪い人がいるか否かを問いかけその症状を申告させる方式）^{4) 6)} ⑨その他の9方式の内、該当するもの1つを回答してもらった（表1）。

校種別に、朝の健康観察の主要な方法を見た。小学校では、学級担任が児童生徒を呼名し、健康状態を申告させる②健康状態申告方式が76.2% (64名)を占めた。また、中学校では、具合の悪い人がいるか問いかけ、その症状を申告させる⑧自己申告方式であり、64.3% (9名)、高校では、全体を見回し、児童生徒の健康状態を観察する④観察方式であり、92.0% (23名)の割合であった。このうち、学校全体で統一せずに、学級担任が朝の健康観察の方法を選択している割合は80.5% (99名)であった。

その健康観察の方法の選択理由を自由記述で回答を求め、内容の同質性をもとにまとめた。小学校に多い④健康状態申告方式では「児童生徒の声を聞いたり表情を見たりすることで、その日の心身の状態を把握したいから (14名)」「子どもと目を合わせ、会話をすることで、教師と子どもの関係性を築きたいから (8名)」「一日に一回は子どもの名前を呼び、応答する機会をつくりたいから (6名)」などの理由があげられた。心身の健康状態を把握することに加え、朝一番のやりとりが子どもとの関係性を築いたり、呼名することで、子ども一人ひとりの存在を認めたりする機会にもなっていることがうかがえる。

杉浦によると「健康状態申告方式」には他覚所見に加え自覚症状が併行して調査できるという長所があるとされている⁶⁾。「健康状態申告方式」を選択した理由には「教師の観察だけではわからないことも

表1：校種別の朝の健康観察の方法 (n=123)

	①氏名読み上げ	②健康状態申告	③理由申告	④観察	⑤相互観察	⑥各自記入	⑦症状読み上げ	⑧自己申告	⑨その他	合計
小	0.0 (0)	76.2 (64)	7.1 (6)	0.0 (0)	1.2 (1)	0.0 (0)	0.0 (0)	1.2 (1)	14.3 (12)	100.0 (84)
中	0.0 (0)	21.5 (3)	0.0 (0)	7.1 (1)	0.0 (0)	7.1 (1)	0.0 (0)	64.3 (0)	0.0 (0)	100.0 (14)
高	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	92.0 (23)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	8.0 (2)	0.0 (0)	100.0 (25)
全校種	0.0 (0)	54.5 (67)	4.9 (6)	19.4 (24)	0.8 (1)	0.8 (1)	0.0 (0)	9.8 (12)	9.8 (12)	100.0 (123)

% (名)

あるので、子どもに健康状態を申告させている」「自分の健康状態を自分の言葉できちんと伝えることができるようになってほしいから」などがあった。まさに、長所が活かされていると考えられる。また、子どもが「ハイ元気です」調子が悪いときは「ハイかせです」「ハイ腹痛です」などと答えたものに対し「元気だね」「まだ良くなるの」などと、学級担任がちょっとした言葉をかけることによって、担任と子どものコミュニケーションが深まっていく⁷⁾とされている。「1人1人の子どもと担任が声をかわすことを朝いちばんに行い、一日をスタートするため。(子どもと教師のふれあいを大切にするため)」「子どもの健康状態、様子を見届け、子どもとの関係を深めるため」と選択理由にあるように、子どもとの朝一番のやりとりを大切にすることで、子どもとの関係性を築く機会となり得ると考えられる。加えて、子ども一人一人の名前を呼ぶことで、子どもは自分の存在が認められているという気持ちになるのか、学級担任と子どもの人間関係が良くなっていく様子も見られる¹⁰⁾ことがあると言う。「1日に一回は必ず、どの子も名前を呼んであげたい。健康観察はそれを行えるまたとない機会です」「一日に一回は必ず全員の名前を呼ぶ1つの機会とも捉えているので」という選択理由もあった。生徒指導の三機能の一つに児童生徒に自己存在感を与えること⁸⁾があげられる。朝の健康観察で名前を呼ぶことは、子ども一人一人の存在を認める機会となると考え、実践されている学級担任が多くいるといえる。さらに「返事をさせることで、一人一人の心の状態も把握するため」「健康状態を申告する際の表情・声のトーン、全体の雰囲気などから言葉以外に伝わってくるもので、児童の状態が把握できるから」「たとえば「元気です」と言ったとしても普段と声の調子が違うと風邪気味、具合が悪いのがわかる。健康状態が良いのか悪いのかの声の調子、姿勢、目の開け方等で判断できるため」という理由もあがった。子どもは、自分の気持ちを言葉でうまく表現できないことが多く、心の問題が顔の表情や行動に現れたり、頭痛・腹痛などの身体症状となって現れたりすることが多い⁹⁾。子どもの表情や顔色を見たり、声を聞いたりすることは、身体症状のみならず心の状態を把握することにも繋がっている。学級担任自身の五感を活用して子どもを捉えているとも考えられる。中学生段階以降になると、精神的な自立とともに生活の自己管理が進む¹⁰⁾。そのため⑧自己申告方式や④観察方式による、本人の訴えを中心とした朝の健康観察になっていると考えら

れる。小学校時代に「健康状態申告方式」により子ども自身が自分の心身の状況を意識し、健康的に過ごせるような⁹⁾力が備わってくると、中学校では本人の自覚症状による訴えを中心にした方法でも可能となってくる。杉浦は「自己申告方式」の弱点として、自覚症状中心となり他覚所見が漏れる⁵⁾ことをあげているが、その点が補われるよう養護教諭が「一人一人の表情や顔色を観察する」ことを大前提にした健康観察の目標を学校全体の理解と協力を得ながら進めていくことで解決できるのではないだろうかと考えられている。

高校に多い④観察方式の選択理由には「SHRの時間が短いことや、学級の人数が多いことから、効率や時間の関係性を考えたため(10名)」「発達段階を考慮し、自分の体調管理はある程度できるようになっていると判断したため(7名)」などがあげられた。これらのことから、限られた時間の中で発達段階に応じた朝の健康観察を行う必要があることが示唆された。

3. 朝の健康観察の活用について

朝の健康観察の活用の仕方について文部科学省「教職員のための子どもの健康観察の方法と問題への対応」¹⁾における健康観察の記録の活用方法を参考にし「児童生徒が自身の健康に興味関心を持ち、自己管理能力を高める」などの11項目の活用方法を提示し5件法により回答を求めた。「十分活かしている」、「活かしている」を『活かしている群』、「あまり活かしていない」、「全く活かしていない」、「その必要はない」を『活かしていない群』にまとめ、割合を算出した(表2)。

最も活かされていたのは、①体調不良を訴えた児童生徒に対する経過観察で98.3%(119名)であった。

表2：朝の健康観察の活用(n=121)

	活かしている群	活かしていない群
①体調不良の経過観察	98.3(119)	1.7(2)
②養教と連携した対応	90.9(110)	9.1(11)
③インフルエンザ等の早期発見・早期対応	89.3(108)	10.7(13)
④コミュニケーションをとるための手段	87.6(106)	12.4(15)
⑤「なんとなく気になる」と感じた児童生徒への対応	86.0(104)	14.0(17)
⑥いじめ等の早期発見・早期対応	85.1(103)	14.9(18)
⑦家庭との連携	76.0(92)	24.0(29)
⑧健康情報を共有する場	72.7(88)	27.3(33)
⑨個別相談・面談時の資料	70.2(85)	29.8(36)
⑩雰囲気の良い学級作り	68.6(83)	31.4(38)
⑪児童生徒の自己管理能力の育成	57.0(69)	43.0(52)

% (名)

次いで、②養護教諭に連絡・相談し、養護教諭と連携した健康相談や保健指導の実施が90.9% (110名)、③児童生徒の健康課題 (インフルエンザ・食中毒等) の早期発見・早期対応が89.3% (108名) であった。

朝元気がない子どもがいたとすれば、その子を注意深く観察し、原因を探り、対策を講じるのが学級担任の朝一番の仕事である¹¹⁾。朝一番の児童生徒の訴えを聞き念頭に置きながら、その後の様子を見て、教室で授業を受けられる状況であるのか、保健室で休む必要があるかどうかを判断されている。

また、養護教諭は学級担任の気付いた異常者に対してより精密で専門的な検診を行い、最終的な判断を下して、学級担任の健康観察を完成させる役割がある⁹⁾。学級担任による経過観察や、健康課題の早期発見・早期対応において、養護教諭と連携し多くの目で児童生徒の様子を捉えることで、より正確かつ組織的な健康観察に繋がっていると考えられる。そのため、より関係の深い経過観察、健康課題の早期発見・早期対応、養護教諭連携の3つが上位を占めたと推察する。朝の健康観察結果は、その後の教育活動における健康観察に活かしながら、養護教諭と連携し、学校全体で児童生徒が健康な状態で学校生活を送ることができるように取り組まれているということが明らかとなった。

4. 特に大切にしている健康観察の機会

一日の教育活動の中で特に大切にしている健康観察の機会について、文部科学省「教職員のための子どもの健康観察の方法と問題への対応」¹⁾を参考にし、「朝の会 (朝の SHR)」「休み時間」などの11機会を提示した。1位から3位まで順位を回答してもらい (3～1点)、項目毎の平均点で比較した (表3)。「朝の会」については、小学校の方が高校よりも有意に高かった ($p<0.05$)。年齢が低いほど、自覚症状やその

訴えだけではなく、学級担任の観察による気付きが加わることで見落としのない健康観察となる。加えて「給食・昼食」についても、小・中学校の方が、高校よりも平均点が有意に高かった ($p<0.05$)。体調によって食べる量には差が出る。義務教育段階では、完全給食制をとっていることが多く、食事量や給食中の会話等から子どもの心身の健康状態を把握していると考えられる。加えて、近年食物アレルギーが全ての教職員にとって急速に関心が高まっている¹²⁾ ことから、完全給食制をとっていない高校よりも高い結果となったと考えられる。

一方で「清掃時」や「放課後」等は高校の方が、小学校よりも平均点が高い ($p<0.05$) という結果となった。高校では、小・中学校に比べ朝の健康観察の時間が短くまた、完全給食制をとっていないところが多く、生徒と関わり合う時間が少ないことが推測される。そのため、観察方式で行われる朝の健康観察よりも、生徒と直接コミュニケーションを取りながら、関与しながら¹³⁾ できる「清掃時」や「放課後」を大切にしているということが考えられる。自由記述において「放課後の生徒からは「本音」が出やすい」という意見も見られた。前述した健康状態申告方式を選択した理由に「教師と子どもの関係性を築くため」「声を聞きたい」などがあげられた。健康観察の機会が違うが、高校においても、コミュニケーションを取りながら行える健康観察を大切にしていると考えられる。

5. 朝の健康観察とそれ以外の健康観察の重要度について

朝の健康観察とそれ以外の健康観察の重要度について「とても重要」「重要」「それほど重要ではない」「重要ではない」(4～1点)の4件法で回答を求め平均点を算出した。「朝の健康観察」が3.74点、「それ以

表3 校種別の「特に大切にしている健康観察の機会」の比較

	小 (n=85)		中 (n=14)		高 (n=34)		F 値	多重比較
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
朝の会 (朝の SHR)	2.86	0.56	2.79	0.80	2.50	0.99	3.037*	小>高
授業 (教室内)	1.22	0.90	0.93	1.14	1.82	0.97	6.391*	高>小 高>中
授業 (教室外)	0.53	0.78	0.14	0.53	0.21	0.59	3.547	
休み時間	0.38	0.71	0.36	0.63	0.15	0.44	1.587	
給食昼食	0.86	0.83	1.07	0.92	0.06	0.24	16.434*	小>高 中>高
清掃時	0.01	0.11	0.00	0.00	0.35	0.69	11.548*	高>小 高>中
帰りの会 (帰りの SHR)	0.08	0.38	0.21	0.43	0.18	0.39	1.165	
放課後	0.00	0.00	0.14	0.36	0.21	0.59	5.474*	高>小
部活動中	0.00	0.00	0.14	0.36	0.32	0.64	11.039*	高>小
学校行事	0.08	0.38	0.21	0.80	0.21	0.48	1.118	
その他	0.00	0.00	0.14	0.53	0.00	0.00	4.474	中>小 中>高

*: $p<0.05$ 自由度はいずれも2

外の健康観察」が3.42点という結果であった。

朝の健康観察の方法による重要度の比較において、t検定を行ったところ呼名方式の方が観察方式よりも朝の健康観察の重要度が有意に高かった (p<0.001)。前述したように、コミュニケーションをとることのできる健康観察の機会が学校種、特に小学校と高等学校には大きな違いがあり、小学校で主要である呼名方式が有意に高くなったと考えられる。加えて、学級の人数による重要度の比較においては、学級の人数が10人以下の方が、学級の人数が40人以下よりも重要度が有意に高かった (p<0.05)。朝の健康観察は学校生活開始時の繁忙の間に、多くの人数をもれなく、一斉に、しかも短時間に観察し終わるように求められる¹⁴⁾ことから、観察をする対象が少ないほど、余裕をもって観察できるという点が影響していると考えられる。

6. 健康観察をしてよかった経験について

健康観察をしてよかった経験の有無の回答を求めた。「よかった経験あり」が87.8% (108名)、「よかつ

た経験なし」が12.2% (15名)であった。良かった経験を自由記述により回答を求め、記述のあった105名の回答について内容の同質性をもとにまとめた (表4)。「児童生徒の体調不良に気付いたり、予測できたりするため、早期対応に繋げることができた (43名)」「体調が良くないことがわかっていたことから、気にかけて過ごしたり、無理をさせないように声をかけたりすることができた (18名)」「体調不良だけではなく、心の健康課題 (悩みや人間関係の問題等) に気づくことができた (9名)」などが得られた。朝の健康観察で把握したことが、その日一日の健康観察に活かされ、子どもの体調管理や、気にかけて過ごすことに繋がり、さらに心の問題を捉えることにも活かされていた。身体症状を判断するためには、身体的なアセスメントに加え、背景要因になる心理的、社会的、生活習慣的なアセスメントをする必要がある¹⁵⁾。今後は、社会的、生活習慣的なアセスメントも視野に入れることで、子どもを多面的にみることができ、より効果的な健康観察になるのではないかと考える。

表4 健康観察をして良かったと感じた経験の内容 (n=105)

児童生徒の体調不良に気付いたり、予測できたりするため、早期対応に繋げることができた (43)	授業中に体調が悪くなったときに対応しやすい。養護教諭との情報共有。
	体調の不良に早く気付くことはできた。
	体調不良にもかかわらず、無理して登校した児童の発見と家庭への連絡を早く行えたこと。
	その後の体調不良などすぐに対応できた。生徒の会話のタネになった。
	具合が悪そうだった生徒が時に重病。
	悩んでいる生徒、体調不良の生徒の発見につながった。
	発熱などに早めに気づき、早退させることができた。
	熱の高い児童に早期に対応することができた。
	授業の途中で体調が悪化したため、自宅へ帰し、早く休ませることができた。
	具合の悪い生徒に早期に対応できた。
	早期に体調不良の生徒に声を掛けたことで、その生徒の回復を早めにする事ができた。(早退・通院等)
	子どもの体調不良に早く気付くことができた。
	体調があまりよくないと訴えてきた子どもに、ビニル袋を持たせたことで、吐いても周囲を汚さなかった。朝頭痛を訴えた子どもの体温をこまめに測り、だんだん熱が上がってきたので帰宅させた。
	後で発熱に早く気付けた。
	本人が言い出せなくてもその様子から体調が良くないことを見つけ、症状が悪化する前に早期対応ができた。
	体の具合が悪いのをすぐに知ることができた。
	体調の変化を早めにキャッチできた。医療機関の受診につなげることができた。
	体調不良に気づき、早めの対応ができた。
	体調不調を予測、対応できたこと。
	その後の体調の変化に気付けた。
児童の病気、体調の悪化を事前に察知し、軽いうちに対処できたこと、	
体調を崩しながらも登校し、我慢している子どももいる。	
授業中に具合が悪くなったとき。	
病気・体調不良の早期発見・早期対応。	
体調不良の児童宅に連絡し、前日の様子を聞き、感染症の広がりを予防できた。	
頭痛など訴えていた子どもの発熱を早く発見することができた。	
「はい」と答えながらも表情がいつもと異なっていたので、熱を測ったり高く、早めに治療する方向にむかえた。	
いつもと違う表情で登校してきたとき、必ず発熱したりするので、声をかけてひどくならないうちに、帰して休ませることができるから。	
いつもと比べて元気がないと感じた子どもに声をかけたところ、高熱であった。	
その後、体調が悪くなった時の対応に役立った。	

	<p>具合が悪くなった場合の早期発見・判断。</p> <p>児童の状態を把握できる。(急な体調不良にすぐ対応できる)</p> <p>病気、症状が重くならないうちに、家庭に返し受診等の対応を早く行うことができた。</p> <p>急な発熱等。</p> <p>体調不良を訴えてきた児童にすぐ対応でき、症状の悪化を防ぐことができた。</p> <p>普段元気な子が珍しく体調不良を訴えたりすると、多くが発熱等の症状があり、しかし自分では気づいていないことがある。→早期発見につながる</p> <p>具合が悪い場合にすぐ対応できた。</p> <p>早期に健康課題を見つけることができた。</p> <p>過敏性の体調不良を訴えた生徒の対応に役立った。</p> <p>体調が悪かったり不安を抱えている生徒に声をかけることで問題が悪化する前に対処できた。</p> <p>具合が悪いと答えた子どもの様子を観察したり声をかけたりして気づかっていることで、体調の変化に気づき、早期の対応をスムーズにできた。</p> <p>朝から発熱の子や水ぼうそうの子など、すぐ発見できる。給食の食べ方から体調がわかる。</p> <p>急に具合が悪くなった時、養護教諭と連携して対応できた。</p>
<p>体調不良だけではなく、心の健康課題(悩みや人間関係の問題等)に気づくことができた(9)</p>	<p>心の健康課題に早期に気付くことができた。</p> <p>体と心は連動しているので心の面で困っていることがあるのではないかと。そういうことを早期に見つけることにつながる事ができた。</p> <p>インフルエンザ等の流行期に早退を促すなどして感染拡大を予防できたと思う。悩みトラブルの早期発見につながるケースが多い。</p> <p>生徒の悩みの発見につながったこと。特に放課後クラスに残っている生徒からは「本音」が出やすい。</p> <p>「元気です」と答えたものの、いつもと声の調子、表情の冴えない子どもに声をかけ友達とのトラブルがあることがわかった。早期発見。</p> <p>人間関係のトラブル。</p> <p>単なる不調ではなく悩みや心配事に気付くことができたから。</p> <p>生徒の悩み等を聞くことができた。</p> <p>早期に心の問題を発見でき対応できた点。</p>
<p>子どもの変化に気づいたり、声をかけたりすることで、教師と子どものコミュニケーションがとれ、学級の雰囲気も良くなった(6)</p>	<p>「毎日元気だね」「昨日具合悪かったみたいだけど、どうだった？」など生徒と話す機会になる。</p> <p>生徒とのコミュニケーションの機会になったり、困っていることを聞けたりした。</p> <p>子どもの変化に気づきコミュニケーションをとることができる。</p> <p>個々の子への声かけに役立っている。</p> <p>子どもたちと毎日会話できる朝の健康観察は和やかな雰囲気づくりに繋がっています。具合のよくない子どもの早期発見につながっています。</p> <p>朝から元気なあいさつ返事で、クラスが明るくなった。</p>
<p>体調が良くないことがわかってきたことから、気にかけて過ぎたり、無理させないように声をかけたりすることができた(18)</p>	<p>活動させるときに無理をさせないように配慮させることができました。</p> <p>体調不良を申し出た生徒に体育などは無理をしないように話すことで早退することなく1日を終えた。</p> <p>体育や外での学校行事がある場合、心づもりしておくことができる。</p> <p>途中で体調が悪くなったとき、ある程度予測できたことです。</p> <p>少しでも健康状態を知っていると、少しでも気にかけて、声をかけたりできる。</p> <p>状態を把握することで教科の指導等への配慮ができる。(体育や給食など)</p> <p>朝、調子が悪そうな子がいたときに、注意して見ていたことで、急な発熱にも迅速に対応できた。</p> <p>朝の健康観察の結果から、授業中の小さな変化に気づくことができた。</p> <p>その後に行われる学校行事や校外学習に生かすことができた。</p> <p>朝の段階で調子が良くないと答えた児童がその後発熱し、注意して見ていたことで養護教諭と連絡を取り合えた。</p> <p>児童の状態を把握したうえで、その日気をつけてみていられる。</p> <p>児童の健康状態がわかると、授業、その他の活動での対応に活用できるから。</p> <p>その後のこどもの様子をつかむのに役立っている。</p> <p>既往症等ある者に関しては、様子を見てこちらから声をかけたりすることで、早期対応できることが多い。</p> <p>体調を経過観察しながら、1日を過ごすことができ、そのおかげで変化に早く気付くことができた。</p> <p>元気がない理由を聞いていて、その後の対応ができたから。</p> <p>朝子ども本人は元気だと申告したが、顔色がよくないと感じ、その後、具合が悪い様子が早目に気付くことができた。</p> <p>常に気にかけておくことができるから。</p>
<p>早目に養護教諭と連携することができた(2)</p>	<p>保健室との連携</p> <p>早目に保健室に連れていけた。</p>
<p>インフルエンザや風邪が流行するのを防ぐことができた(5)</p>	<p>冬場の健康観察をいつもより丁寧に、インフルエンザの感染拡大を防止できた。</p> <p>インフルエンザ流行の予防。</p> <p>インフルエンザや風邪が流行した時。</p> <p>インフルエンザが広がるのを防げた。</p> <p>風邪気味の子が多い時には、マスクを着けさせたり体育の内容を変えたりなど、適切な対応ができた。</p>

子どもの状態がわかり、変化に気づきやすくなったり、保護者に様子を詳しく説明できたりする (12)	子どもの健康状態を1日の早い段階で認知できるので。
	子どもの状態がわかること。
	毎日やっている元気ですと答えていても、子どものちょっとした変化に気付くことがある。
	生徒の体調やけがの状態を把握できた。
	健康観察のやりとりから前日の家庭の過ごし方がわかったり、部活動の様子がわかったり、学校外での子素もの実情が見えてくる。
	実態把握ができる。
	早退時、保護者に児童の様子を明確に伝えることができた。
	健康観察の結果、不調だと知ると、詳しく聞いてみる。すると前日の生活の様子などもわかり、児童理解につながった。(練習試合が続き疲れている。母親が休みの日だと腹痛を訴えるなど)
	子どものことが見えてくる。
	体育の授業を見学させるかの判断や、登校後の体調変化の際、家庭への連絡の参考になる。
その他 (10)	心身の調子を捉えて指導に役立てる。
	生徒理解。
	生徒指導上の問題が分かることがあった。
	健康観察をするのは当たり前のことである。
	子ども1人1人を全体で育てていくため、当たり前のことなので。
	元気がない、食欲がないなどの時に参考できた。
	早く気付く。
	クラス全員が元気な時にうれしく思う。
	だいたいの場合よかったです。
早期発見できたから。	
心身の問題に早目に気づき対応することができた。	
体調不良やトラブル等の原因を考える際に、健康観察の時の様子から判明することがある。	

IV まとめと今後の課題

1. 朝の健康観察は、小・中学校ともに約100.0%、高校では73.5%の割合で実施していた。
2. 校種別にみた、朝の健康観察の主要方法は、小学校では「健康状態申告方式」、中学校では「自己申告方式」、高校では「観察方式」であった。
3. 朝の健康観察は「体調不良を訴えた児童生徒の経過観察」に最も活かされていた。
4. 健康観察の機会の内、「朝の会」を小学校では特に大切にしていた。高校では、「清掃時」や「放課後」等も大切にしていた。

本研究において、朝の健康観察の方法が発達段階に応じて選択されていたことがわかった。加えて、朝の健康観察が、その日一日の健康観察に活かされていたことから、重点的に行う必要がある。また、心身の状態のみならず、社会的、生活習慣的な背景にも目を向けることで、より健康観察の効果が高まるのではないかと考える。

今後の課題として、校種別の分析を深めることができるよう、さらに対象人数を増やし、学校の教育活動との関わりや発達段階に応じた、より確実な健康観察の方法・活用などを検討する必要があると考える。

最後に、本研究を進めるにあたり、お忙しい中で、調査にご協力くださいましたA県とB県の小・中・高校の学級担任の皆さまに深く感謝申し上げます。

【引用文献】

- 1) 文部科学省：教職員のための子どもの健康観察の方法と問題への対応，6-16，2009
- 2) 江崎和子，土井素子：小学生における「朝の健康観察簿」の活用に関する研究，九州女子大学紀要，第49巻2号，177，2012
- 3) 中澤千晶，中嶋知美，野口由貴他：朝の健康観察の実際に関する調査研究—養護教諭及び担任の意識—，平成23年度女子栄養大学論文（未発表），27-28，2012
- 4) 和泉いより，上原弥生，大塚美優他：学校が行う朝の健康観察の実際と養護教諭の課題意識に関する研究，平成22年度女子栄養大学論文（未発表），5-6，2011
- 5) 小倉学：養護教諭の職務，115-116，ぎょうせい，1986
- 6) 杉浦守邦：健康観察のすすめ方マニュアル，21，53-55，70-74，東山書房，1992
- 7) 兼子敦子：健康観察簿，健康教室 保健室のアイデアファイル②養護教諭の仕事のくふう②，第66巻9号，102-103，2015
- 8) 文部科学省：生徒指導提要，2，5，2010
- 9) 今野洋子：健康観察簿，健康教室 保健室のアイデアファイル②養護教諭の仕事のくふう，第66巻9号，106-107，2015
- 10) 前掲書8)，P143-144
- 11) 長根光男：見直そう朝の健康観察，実践読本 子どもの「心と体を援助するく特集」，第48巻第3号，78-85，1993
- 12) 学校給食における食物アレルギー対応に関する調査研究協力者会議：今後の学校給食における食物アレル

ギー対応について（最終報告）， 1， 2014

13) 前掲書10, P67

14) 前掲書 6, P12-13

15) 三木とみこ，徳山美智子：養護教諭が行う健康相談・健康相談活動の理論と実際， 94-95， ぎょうせい， 2014

(2016. 8. 8 受理)